

# 『パラダイス・ロースト』の神義論

Theodicy as a Basis for *Paradise Lost*

室 田 五 郎

一、はじめに

ミルトンは『パラダイス・ロースト』の冒頭において、聖書に基づいて次のように歌う。

人のはじめの不従順につき、又かの禁制の木の实につき（歌え）、その致死の味は世界に死とわれらすべての苦をきたらせり楽園を失わせて。されど一人の大いなる人われらを復し、恵みの座を取り戻す時至る。

(I 115)

この偉大なる主題の高みにまで永遠の摂理を擁護できるように又人に神の道を正しいと証できるように<sup>(1)</sup>

(I 241-26)

ミルトンが「冒険の歌」(I 13)を歌うためには、ヨーロッパの古典文学を熟知して、それを用い、且つそれを乗り越えようとしたことは周知のことである。しかし更に聖書的な神義論<sup>(2)</sup>を自らのために構成せずには、この叙事詩は

全く書けなかったであろう。その構成にあたつて次のような問題を、彼なりに解決して置かなければならなかったであろう。

一、神が全能にして絶対ならば何故悪魔が存在するか。

二、神が正しい神ならば何故神は悪魔を放置し、野放しにして置くのか。

三、神が歴史の中に介入したことにとどのような正当性があり、それはどのように弁護されるのか。

その解決の鍵は、「自由」論にある。即ちミルトンの神義論は自由意志の擁護にかかつて<sup>(3)</sup>いる。そしてそれは『パラダイス・ロースト』において最も鮮明に展開されている。

## 二、自由論

ミルトンの自由論の土台は神の溢れる善である。『パラダイス・ロースト』全体を通じて見逃せないことの一つに神の善ということがある。ミルトンは神の名を語るとき、

しばしば神と善とを結びつける。そしてそれがどういう内容であるかを注意深く語るのである。第一に、神の創造の業は神の自由意志に基づくものであり、<sup>(4)</sup>第二に、神の創造の業は完全に善であつた。<sup>(5)</sup>

全能である神が、他の何物かに支配されるはずがないから、必然にも、偶然にも支配されない。だから神の創造は神の全き自由な意志でなされたとミルトンは考える。

われみずから退くとも限定されず

わが恵を及ぼさずといえども、自由なり

為すも、せざるも。されば必然も偶然も

われに及ばず。わが命ずる事こそ運命ぞ。

(Ⅶ 一七〇—一七三)

そして善は神が惜しみなく与える無限の富であることをミルトンはくり返し『パラダイス・ロースト』全体にわたって述べている。<sup>(6)</sup>そしてそれはミルトンだけに限られた特別な思想ではなく、むしろ聖書そのものに基づき、又ヨーロッパ全体に広く知られていたプラトニズムにも重なる思想でもあつた。<sup>(7)</sup>

これらは汝の栄光の業なり、善の源なる  
全能者よ、汝のものなり、この宇宙の造り  
不思議に美し。汝の不思議いばかりか  
言葉もなし。それ汝はこの天上に座して  
目に見えず。たとえ汝が見えるとも微か  
地上のこの汝の業の中に、されどそは示す  
思いを越える汝の善と聖なる力を。

(V 一五三—五九)

祝福あれ宇宙の主よ、常に恵みに満ちて  
われらに善のみ賜え。さればもし夜が  
悪しき事を構え、或は密かに思うなら  
そを散らしたまえ、今や光が闇を消す如く。

(V 二〇五—八)

ミルトンにとって善とは、神の一方的な絶大なる善意に  
よって創造の中に示される万物の富であつて、祝福によつ  
て人を幸いにするものである。

ああ何と呼びかけん、汝はすべての上に  
人の上に、人より高くいまして、  
呼びかけを遙かに越えていませば。いかに  
讃えん、造り主よ、この宇宙も  
人に与えしこのすべての善も人の幸いの為  
かくも豊かに、しかもかくも自由に  
汝はすべてのものを備えたまえり。

(VII 三五七—六三)

ミルトンにとって神による最高の善に仕えることが自由  
なのである。即ち、最高の善を知る事が、最高の価値を知  
ることであり、その価値を尊び、その価値に生きることが  
喜びであり、栄光であり、祝福であり、心が自由であるこ  
とを意味する。従つて最高の善をもたらす神に従うことは  
人を自由にし、そのような、神に逆らうことは何か低いも  
のに奴隷となることである。

治める者がいと高き価値を持ち優れて  
被治者の上に立つ。汝のこれは隷従、それ  
愚者に仕える事、正に汝に仕える者の如く、

汝自らは自由ならず、自らに奴隷なり。

(VI 一七七一八二)

最高の富を善として持つ神自身は完全に自由であり、人に幸いのみを望み期待し、その幸いと喜びの中で真に自由であることを欲して、人に自由を与えた。神が人を自由にあるべきことを定めたのは、人が強制されて神に服従するならば、たとえ神に服従しても、それは人を本当に幸いしないからである。

自由なくていかなる真実の証を示しえたか

真の務に、固き信仰に、愛に就き

そこにただ果たすべき事のみが現れ

人の意志なければ。いかなる誉れあらん。

かかる服従からわれいかなる喜びを受けん

意志も、理性も（理性も又選択なり）、

使われず、空しく、共に自由奪われて

共に力無く、仕える必然にたいしてで

われにで無くば。

(III 一〇三一一)

自由は神に正しく服従することにおいてのみ存在する。

神に自由に服従するとは、自由意志で、強制されずに、自発的に、心から、偽りなく、忠実に、愛して神に服従することを意味する。未だ罪を知らぬアダムとエバはこのような自由の中に生きていた。叛逆する悪を知らずに、神の溢れる最高の善に感謝して喜びを以て生きることが自由であった。

それ彼らの聖なる顔に

栄光ある造り主の姿がかがやき

真実、知恵、及び厳しく純なる清らかさが

厳然と、しかし真に親しき自由の中にあり

(IV 二九一九四)

神は天使も人も自由なものに造った。その自由の中に、天使と人は祝福されているのである。自由意志は、神が一方的に与えた全く善意に溢れた豊かな賜物なのである。<sup>(8)</sup>天使も人もその自由の中で容易に神に感謝して、自然の富に囲まれて生きることを許され、且つ神に喜びを以て（自由

に)服従することを期待されていた。その服従は喜び以外の何物でもなかったはずである。

この祝福された自由は実は神から離れては存在しえないのである。なぜなら自由そのものは神から与えられたものであり、天使からでも人からでもないからである。霊的な祝福は神より自由な服従の中で与えられるが、その自由が一人歩きをはじめて神から離れて用いられるとき、その自由は呪いとなる。それは神の責任ではない。

神は天使も人も自由な存在として造った。そしてその原則を変えることはない。神は自ら立てた原則に真実である。この真実なる神の善意に対して、悪意又は不真実をもつて対応するならば本来の祝福を呪いに変えるものとなる。神は善なるものに祝福となり、悪しきものに呪いとなるように見える。

神からはなれた自由は祝福を失い、喜びでなくなり、全く反対に苦しみの基になる。最も善いものは善用されてこそ善いのである。しかし悪用される可能性がある。悪用されるならば最も呪わしいものに変質する。真実なる神に真実に応えることが正義に適い善なることとなるが、もし与えられた自由意志で神に不真実に応え、神の善意に感謝し

ないならば罪である。

われ自身も、他の全ての天使らも、立ちて玉座の神の御顔を拝す。われらの幸い汝の幸いと同じく、服従と共に成る。

他の保障 何もなし。自由にわれら仕えるはわれら自由に愛するゆえ、われらの意志に愛するか否かが存し、そこに立つか倒れる。されば或る者倒れ、不服従に落ちたり。

天から最深の地獄に落ちたり、ああ墜落は何たる祝福の高き座から、何たる悲しみに！

(V 五三五—四三)

### 三、自由は傷を負った

神は天使も人も自由なものとして造った。その自由が祝福であるためには神から離れてはならないとすれば、原罪において自由はもはや祝福ではなくなったことを意味する。即ち自由は存在してもそれは祝福から呪いに変質したのである。いいかえれば自由は重大な傷を負ったのであ

る。つまり自由は幸いをもたらさずに、かえって不幸をもたらすのである。では自由を与えた神に責任があるかというところというのではない。自由は正しく用いられれば善であつて、それを感謝せず、悪用して自ら苦しむ結果になったからといって、神が自由を取り去るということは、神自らが自己矛盾をおこすことになるのである。

自由は神から与えられた祝福であるということは永遠に変わらない。それを神に感謝して神への応答として用いるものには幸いとなるが、そうでないものには禍いとなる。それは神が禍いにかえるのではなく、自由を悪用するものがある。もしサタンのように、神が呪うと考えるならば、そこには神に対する癒しがたい忘恩の罪があるといわなければならない。

#### 忘恩の輩、彼はわれより

全てを得ていた。われは彼を正しく造つた

十分に立てるように、倒れるのも自由だが。

斯くの如くに全ての天使達を造つた。

立てる者も、倒れし者も共に。

自由に立つ者は立ち、倒れし者は倒れたり。

#### (Ⅲ 九七—一〇二)

それゆえサタンの叛逆により、神が天使に自由を与えたことに対する後悔はなく、ましてサタンの自由を束縛するということもない。神は更に、地獄落ちの後のサタンの地獄脱出に対しても、これを看過する。むしろ、サタンは神の許しによって脱出できたとさえいえよう。つまり、神はサタンの束縛を意図しなかったといえよう。

地獄の意味は何か。それは天国からの隔絶のためであつて、地獄は呪われた場所である。天国が悪の存在を拒絶するために、サタンとその一派のために設けられた場所といつてもいいかもしれない。御子の激しい追撃にあったサタンにとつては、地獄は一つのがれの場所だったかもしれない。

思いみよ、我先に逃げ、追われ、打たれ

天の激しい雷を受けて、ひたすら

隠れがを深みに求めし時、この地獄は

負傷からの逃れ場と見えたり。又、伸びて

火の海に繋がれし時を思え。更に甚だし。

(XII 一六五—一六九)

サタンは天使として不滅の命と絶大なる自由という神与の祝福を持っていた。しかし神与の栄光ある自由は一旦神からはなれては、傲慢と野望を求める自己中心的な自由とならざるをえない。即ち呪わしい悪となったのである(II 四四七—七五五)。かくて以前の祝福が今は呪いとなった。

まさにサタンは忘恩の罪により天国にいるときから、この呪いを身に引き寄せていたのである。そして地獄に落とされたが、その地獄もサタンを悔い改めさせなかった。なぜなら神与の絶大なる自由の大きさは、今や彼の忘恩の絶大さを示すものとなり、彼は際限なく神の善に叛逆するものとなり切ってしまったからだ。

サタンの自由の絶大さが、彼に地獄から脱出せしめるが、実はそれが彼を決して呪いから解放するものとはならず、却って彼をいつそう呪うものとなってしまったのである。

彼処へ、悪しき復しゅうの念を一杯に積み

呪われて、呪いの時に、彼は急ぎ航く。

(II 一〇五四—一五五)

そして次のサタンの独白はいつそう地獄の意味を明らかにするだろう。

遂に高ぶりと、更に悪しき野心故落ちたり  
天のうえなき王との戦いにて。

ああ何故。彼謂れ無くかかる仕打受けたり  
われから。彼はわれを造りしに非ずや、  
かつての輝く位に包みて。又善に満ちて

誰をも咎めず。彼に仕えるは難からざりき。  
何にもまして易しきかな、彼を讃えるは。

いと易き恩返し。更に彼に謝意を示すは  
当然。されど彼の善が全てわれに悪となり

害のみもたらせり。かくも高く挙げられ  
われ服従を不当と拒み、もう一步高ければ  
最高座に昇るならんと思ひ、又忽ち終わらせんと思へり、無限の感謝の莫大な負債を  
常に払い、常に負うは甚だ面倒なりとて。

われが彼から常に受けしものを忘れ

しかも知らざりき、感謝の心は

負えども負わず、されど常に払い、同時に

負いつつ、返済するを。されば何が重荷か。

(IV 四〇—五七)

されば彼の愛に呪いあれ、それ愛も憎悪も

われには同じにして、永遠の災いなり。

否汝に呪いあれ。それ彼の意に敵し、心が

自ら自由を選びしに、まさしく今嘆くゆえ。

われこそ哀れ。何処に逃れんか

無限の怒りと無限の絶望を。

何処に逃れようと地獄。われ自身が地獄。

(IV 六九—七五)

もともと神が定めた場所としての地獄が本来地獄のすべてではない。その場所はサタンとその配下全員を天国から隔絶するために詩の中に意図されていると見ていいだろう。

真の地獄はサタンの心の中にある。それを引き起こした

のは神の悪意とか呪いとかではない。むしろ全く逆に、神の善意と恵みがサタンの心の中に苦しみを引き起こしたのである。

サタンは神の善を悪に変えようとする (I 二五五)。それがサタンの本質となったのである。ところが神の善はサタンの悪を善に変えることを意図する。このことを示すものとして次の引用は興味深い。それはサタンが初めてエデンの園でエバに出会ったときの描写である。<sup>(11)</sup>

彼女の姿

天使の如、さらに勝りて柔和に女らしく

その優雅なる無垢、そのあらゆる

身振り、僅かの動きさえ畏れしめたり

彼の悪意をば。又魅惑の強奪もて奪いたり

携え来たれる恐るべき意図の、恐ろしさを。

その間さすかの悪しき者も呆然と立てり

己が悪を忘れて、然れば暫し動かず

呆けて善のまま、悪意の心が抜けて

騙しも、憎しみも、妬みも、復しゅうもなく。

されど彼の内に燃える熱き地獄は、



天にいてさへ燃える故、すぐ喜びを消し、  
今や更に彼を苦しめる。更に、彼が目前に

己には失せたる喜びを見て一層。すぐ

恐ろしき憎しみを取戻し、あらゆる

犯意を、この時を幸いと、掻き立てる。

思ひよ、何処へ誘ひしか。何たる甘き

力が、かくもわれを酔わせ忘れしめしか

ここに來し動機を。憎悪にて愛ならず。否

樂園を地獄へもたらす望みなく、ここに

快樂を味わう望みなく。只全ての快を破壊

すること、但し破壊の快は別、他の喜びは

われに失せたり。

(IX 四五七—七九)

このようにサタンは自由に神に対して叛逆行為を繰り返  
し、それを積み重ねるが、その結果は悪しき実を結んで自  
らを苛み且つ呪う結果にしかならない。神はサタンの跳梁  
を許しているが、それは神の創造の善が悪になつたことに  
ならない。むしろそれは神の善がいつそう不動であること  
を証明する。

然ればそこから

立つ事も擡頭も叶わざりしならん、もし

万物を支配する天の意志と高い許しが

彼を自由に、己が暗き謀はかりごとに任せざりしなら。

その結果、罪の繰り返しが、彼をして

自らの上に呪いを招くに至る。彼は求めて

他に悪を計るが、憤怒して知るに至るなり、

即ち、彼の悪計がもたらすものは只、人に

無限の善、恵み、あわれみが示されるを、

人は彼により、罪に落ちたれど。されど彼

三巴に破壊、怒り、復しゅう、注がれたり。

(I 二一〇—二二〇)

サタンが地獄という場所を抜け出て動き回る自由を許さ  
れているという筋書きはミルトンにより意図的に重要な意  
味を含むものとして構成されているように思われる。即  
ち、サタンには絶大な自由意志が与えられていることをこ  
の詩は示しているのだ。

サタンには天国から隔絶されてもなお反抗しつづける自

由があつたことをこの詩は印象づけている。神から与えられた自由を神に反抗するために用いるので、その自由は呪われたものとなつてゐる。そしてサタンの無制限な自由は心の中に無限に地獄の苦しみを作り出してしまふ。

この詩の中でサタンが持つ絶大なる自由は神に限り無く反抗できる可能性を持つものとして描かれてゐるので、読者の想像力を正にサタンの側に引きつけてしまふのである。神はサタンの自由を容認するので、サタンは自力で自由になつたと誤解する<sup>(12)</sup>。そして読者はサタンの（忘恩から出る偽りの）論理にすっかり嵌められてしまい、神が残酷な存在とさえ見えてしまうほどである。そしてそのように見える神に堂々と反抗するサタンがすばらしい英雄に見えるてくるのは当然であらう。

サタンの滅びと呪いはサタン自身が招いたものであることは明らかである。それにもかかわらず、読者が『パラダイス・ロースト』の一二巻しか読まないとか、敢えてミルトン自身が繰り返し述べてゐる主張に耳を傾けないのは、それ自体正に読者の「自由」であるが、それはミルトンから見れば『パラダイス・ロースト』を曲解することではない。丁度それは、サタンが神の善を悪に変えようと

したのと同じように、読者がミルトンの意図に反感を抱くことになりかねない。読者がこのようなサタンに引きつけられるのは、自由というものがそれ自身目的となつてゐる存在があたかも大きな美徳を持つかのように見えるからかもしれない。

#### 四、神の介入

サタンの跳梁のために生じた人の原罪は、人に苦しみと死をもたらした。神によつて与えられた自由は本来神の恵みであり、祝福である。しかし人が原罪を犯したために、その自由が呪いとなつてしまつた。即ち、神との正しい信頼関係を全うするために用いられてこそ真に自由が善き自由であるのに、人が神を離れた結果、自由は人のものとなり、人自身のために用いられるようになった。即ち自由は原罪と同時に重大な傷を負つたのである。

原罪の結果人は死ぬべきものとなつた。死ぬべき人が持つ自由はサタンの自由に比べてそれほど大きくない。それでも自由は人の欲望のために使われ、呪いをもたらした。しかしこのような悪しき不完全な自由でさえ、人には必要

である。たとえそれが次々に不幸をもたらす可能性があつても、誰からも奪われてはならないものである。もし誰から奪われているなら、それを回復することこそ祝福に価することのように思われる。

反面、自由があるために様々な苦しみと罪の悩みがあるとしても自由を捨てることが良いことにはならない。何故なら、人は本来「自由」に造られているからである。しかし神を見失つた自由は人を真に自由にせず、却つてその自由は自分自身に対する奴隷としてしまうのである。<sup>(13)</sup>それは神の責任であらうか。ミルトンは神に語らせる。

さればいささかの刺激、運命の影によらず  
われより不動に予見されし何物にもよらず  
彼ら罪を犯す。己に権威となる、万事に、  
判断にも選択にも、共に。斯くもわれ  
彼らを造れり自由に。彼らに自由は必須、  
彼ら己を奴隷とするか。さなくば変えんか  
彼らの性質を。高き定め撤回せんか、それ  
不変にして、永遠なるに。その定めは命ず  
彼らの自由を。彼ら自ら命ぜり己が滅びを。

このため、いのちという最も根源的な恩恵も呪いとなり<sup>(14)</sup>、戦争が終つて平和が回復しても平和が呪いとなり<sup>(15)</sup>、神の溢れる恵みは却つて人の欲望をかきたてて悪となり、<sup>(16)</sup>世界は悪から悪へと堕ちていく。いわば、神は人の自由を損なわぬために人が呪われるに任せた<sup>(17)</sup>とさえいえる。人の自由は原罪により、本来の姿を失ひ、それは欲望を拡大する自由となつたのである。それは「正しき理性」を失つたからである。<sup>(19)</sup>

では人が本来の真の自由を回復するにはどうすればよい。答えは明白である。即ち人が神に立ち返ることである。いいかえれば、「傷ついた」自由の呪いから解放された自由を回復することである。その自由を完全に回復するために神の介入が必要になつた。人の滅びに対する神の対処は、サタンによる悪の侵入をバネとして、人に恩恵を増し加え、心の中に祝福に満ちた自由を回復させ、善と悪の中から善を選び取らせることである。

神の介入は『パラダイス・ロースト』の中では未来の歴史のこととして預言として語られているが、それを信じて

望むアダムにはすでに喜びをもたらし、心の中に「内なるパラダイス」をもたらしたのである。

神自らが人の歴史に介入して人に正しい自由を回復させるとはどういうことか。神の介入は人を束縛することにならないか。神は人を自由意志の存在として造った。神は自ら定めた原則に忠実であるはずである。だから神が人の自由を束縛しては自己矛盾を犯すことになるだろう。自由の原則の中に造られた人を生き返らせるのはやはり自由の原則以外にはない。

神の介入は傷ついた自由を祝福にみちた自由に回復するためであった。<sup>(20)</sup> その介入は神の代理者たる御子の活動によつて為された。聖書に基づく御子キリストの活動は神の権威を持っていたが、人を束縛しなかった。むしろ彼は仕えられるのではなく、仕えるために来た。<sup>(21)</sup> 彼は人が神から離れてしまった元凶である罪（原罪）を取り除くために来た。<sup>(22)</sup>

御子の使命は罪を神の名において赦すことであつた。なぜなら神が与えた自由が、人に呪いとなつたのは、人が神から離れたからである。しかし彼は神の名において罪を赦すという活動のゆえに、罪なくして罪を負わされ極刑を受

け、その刑死においてすべての人に捨てられた。

御子の死は、神が御子の犠牲において人の罪深さを引き受けた神の無限の忍耐を示すドラマであつた。そのドラマは罪の奴隷になつて呻吟している魂を捕えるが、決して束縛するのではない。むしろその魂を罪の悪しき呪いから解放するのである。<sup>(23)</sup>

御子の死は神と人とを引き離している罪を取り除くための和解の働きの結果として起こつた。又それは神の無限の善意と赦しをもつて人を罪という呪いから買い取ろうとする働きの結果として起こつた。又それは絶大な悪の力に対しては、更にそれに上回る善の力を以て神が戦つた結果として起こつた。そのことが罪を赦された者によつて信じられ、御子がその死から復活されたことが信じられ、そして彼らは神の善に生きる者として神に自由に服従するものとなる、<sup>(24)</sup> というのがミルトンによる考え方であつただろう。

右のようなことが『パラダイス・ロースト』十二巻において極めて圧縮された形で語られている。それは福音書の語るメッセージとほぼ一致する。しかしミルトンの語る物語で特徴となることは、自由という言葉が福音書のメッセージの注となっている点である。いうまでもなく自由と

いう言葉は多くの誤解を生みやすい。神を見失った人にとってサタンのような自由の使い方が最もよく理解できることをミルトンはよく知っていたに違いない。しかしそれをよく知った上で真の自由とは何かを熟っぽく『パラダイス・ロースト』の中で読者に訴えているように思われる。

ミルトンにとって自由は第一に信仰の問題であつた。にもかかわらず、それは政治・文化・社会にわたる極めて大きな意味を持っている。その幅広い意味も神の摂理と切り離せないことを知らなければならない。

彼は『アレオパジティカ』の中で自由の必要を述べていた。彼の自由論を神への信仰ぬきで語ることとはできない。彼には偉大な人間信頼の樂觀論があるようにも見えるが、実は神義論を踏まえたきびしい神の目がそこに在り、ミルトンはそれを土台にして人間的現実を深く洞察した人 (skilful considers of human things) の一人なのであつた。

## むすび

ミルトンの自由論は神の善と深く結びつけて考えられるべきものである。神の善なる恵みとしての自由は人にとつ

ても善なるものとして働くことがなければ、それは悪となる。そしてそれはミルトンが神学的のみならず、現実を鋭く観察して得た結論であつたろう。なぜなら、現実の世界では、自由はしばしば有害な結果を生み、混乱を招いているからである。本来善いものが悪い結果を生むならばどこにその理由があるのだろうか。

ミルトンは自由を信仰の立場をぬきにして語ることをしなかつた。そして自由が悪い結果を生む理由を人の原罪 (罪深さ)<sup>(25)</sup> であると考えるのである。そして神はこの罪深さと争うのである。

十一、十二巻において天使ミカエルは人類の未来について幻と説明によつてアダムに語るのであるが、悪の力が善の力を著しく圧迫しているゆえに、悪の力が圧倒的に猛威を振るっている歴史が示されるのである。そして善なる神が、悪の力に閉じこめられた世界の中に手をさしのべることが予告される。それは神による、人の歴史への介入である。

汝の末に起こる事を、善き事も悪しき事も共に聞くと見え、天の恩寵が争うゆえに

人の罪深さと。

(XI 三五八一六〇)

神が人の罪深さと争うということは、神が悪との戦いを  
するということの意味する。神の戦いは人の罪深さと争う  
ことである。それは神の恵みを以て人の罪深さと争うとい  
うことである。神対人という図式ではなく「恵み」対「罪  
深さ」という対立の図式である。

神の恵みが人の罪深さと争うということは神の恵みが人  
の罪深さを圧倒するという確信があつて神が宣言するメッ  
セージである。もちろん、右のメッセージは天使ミカエル  
がアダムに語った内容であるが、ミカエルは神につかわさ  
れて語るので神のメッセージと解すべきである。

神は必ず実現することを語る。それゆえ神の恵みは人の  
罪深さに勝つのである。いい変えれば、善なる神は悪の力  
に争つて勝つのである。即ち善が悪に勝つのである。それ  
は必ず起こる。それゆえに神は救われた者に「善を以て悪  
に勝つ」戦いに参加するように促すのである。そしてその  
戦いは失望に終ることはない、なぜなら神は終りの日に悪  
の力を必ず滅ぼすからである。

神が恵みを以て人の罪深さと争うということは、人間の  
な目で見ると弱いものが強いものと争うことのように見え  
る。しかし神の恵みは無限の富であり、それが善なる神の  
賜物であることは既に述べた。この戦いにおいて、人の罪  
深さが、神の恵みの豊かさと深さで捉えられ掩われなけれ  
ばならない。人が罪を犯したゆえに、神が特別な恵みを増  
し加えて罪を赦し、その上更に神と人との新しい契約を立  
てて人を新しい関係に入れるということである。

このことは単なる思弁によらず、瞑想によらず、人の歴  
史の中で、神の御子が受肉するという事実によつて行われ  
る。神による、悪との戦いは、この御子の受肉を通して人  
の罪を赦すことからはじまるのである。

神は創造において人に自由意志を与えたとミルトンは主  
張する。しかしその自由のために人が罪におちることを神  
はとめることをしなかったが、その罪のゆえに死ぬものと  
なった人の苦しみを、神自らが負うことになったと彼は主  
張する。<sup>(26)</sup>

神は人に警告を与えたが、人がそれに従わなかったので  
あり、神にとつては自由を与えたことに対する高価な価を  
自ら払わなければならないのであったのである。そしてそのこ

とが人の歴史の中に起こったとミルトンは考える。そして十二巻においてミカエルの口を通して未来のこととして預言させるのである。

人の叛逆が神の恵みの増加を意味することは何という逆説であろうか。このことをアダムは次のように語る。

ああ、無限の善にして、素晴らしき善よ

悪よりこの全ての善を生み出すとは

更に悪を善に変えるとは。驚異なるかな

創造により初めに、闇の中より光を

もたらしし恵みに勝りて。われ迷いて立つ。

われ今悔いて悲しむべきか。罪を。それ

われに責任あり。或いは喜ぶべきか、

大いに。大いなる善がそこに湧き出で

神に一層の栄光、一層の善意が人に

神より及び、怒りを超えて恵み満ちるとて。

(XII 四六九—七八)<sup>(27)</sup>

これは「幸いの罪」といわれている。神が人の罪にもかかわらず人に恵みを増し加えるのは、その恵みの絶大さに

よって人が罪から赦されて、罪から恵みへと移しかえられる機会が十分に与えられるためである。そして神は人が自由意志によって再び神の恵みのゆえに神との新しい契約を受け入れて神に立ち返って服従することを可能にするのである。それが「恵み」が「罪深さ」と争う目的なのである。

ミルトンの考えでは、このように作りかえられた人は、新しい契約の中に立つてもう一度人生をやり直すことができ、これまでに罪におちたことがあったとしても、いや却ってそれゆえにこそ、神に服従する真の自由を用いて、悪をとらずに善をとることができると主張する。それが本当の自由であり、その自由が悪にかつために必要であるというのである。<sup>(28)</sup>

ミルトンは真の自由は美德であり、美德としての自由は善と悪を知ってその中からもう一度善をえらぶ自由を持つことだといふ。<sup>(29)</sup> それは自由の霊による自由である。

されど天から

彼は己が民に慰めぬしを送らん

そは天にいます父の約束にして、父の霊

として民に留らん。斯く愛の中に働く  
信仰の律法を彼らの心にかきしるさん。

そは彼らを全ての真理に導き、靈の武器  
もて鎧わしめ、サタンの攻撃に耐えしめ

彼の火の如き激しき矢を終らしめん為

如何なる人が彼らに敵せん。恐れ無ければ。

死に至る迄も。かかる迫害にも

内なる慰めが与えられて償われ

しばしば支えられて、高ぶる迫害者をも

驚かすに至らん。それ靈は

彼の使徒達にまず注がれ、彼らを送り出し

国々に福音を述べさせ、更に洗礼を受けし

全てのものに、不思議なる賜物を与え

あらゆる言葉を語らせ、あらゆる奇跡を

主が彼らの前で為しし如くなせり。

(XII 四八五—五〇二)

ミルトンにとって自由は神に創造された人の存在の根底  
であつて靈的な意味を持っていた。その自由は聖靈の与え  
る良心の自由であつて、その自由を妨げる一切の力に対

し、とくに良心をあやまたせ、又は良心を眠らせ、鈍らせ  
る一切の力に反対した。

斯く彼ら

各国の多数の民に説きて受容せしむ

天からの音づれを、喜びて。やがて

使命を果たし、馳せ場をおわり

彼らの教義と行伝を書き残して

逝く。されど彼らの所に、警告通り、

狼共が聖職者として、後に来る。欲深の狼

彼らは天のあらゆる秘義を

彼自身の卑しき機会の為に用いん。

即ち金銭や野心に関わりて、更に真理を

迷信や言い伝えをもて汚さん。

そは、彼の聖き書物の記録にのみ残り

靈によらざれば理解されざるにも拘らず。

更に彼ら、名譽、地位、称号を我が物と

せん為に求め、又これらのものをもつて

世俗の權威に加わり、常に靈によつて歩む

如く見せかけ、己の為に神の靈を



独り占めせん、全て信する者に約束され与えられるものなるに。その口実から靈的な律法が肉欲の権力によつて、力で全ての良心を圧せん。誰も見出さぬ律法。書き残されてもいず、靈が内から心に刻み付けもせぬ如き。然れば彼らの為す事恵みの靈に圧力をかける事ならざるを得ず、その伴侶の自由をも。それ、信仰により建つ神の生ける宮を破壊する事なり。それは他の信仰でなく、己の信仰による。地上で信仰と良心に敵して誰か誤りなしと謂われ得るか。されど多くの者当然の如く思う。それ故に激しき迫害が起こらん、靈とまことによる礼拝を守る全ての人々のうえに。他の大部分の者は外側の儀式やうわべの形式の宗教に満足するかに見える。真理は退く、中傷の投矢に刺されて。信仰の業はほとんど見出されず。

(XII 五〇二―三七)

ミルトンは神から与えられる良心の自由を妨げる力に反対するばかりではなく、その内的自由に目ざめない人に、神に立つて正しく自由であれと促しているといつてよいであらう。それゆえ、人が命じられた通りにしたからといって、それがたとえ正しいことであっても正統とはいえない、自由がなければ正統自体が異端であるといっている。<sup>(30)</sup> いうまでもなくミルトンは彼の時代の社会における自由の唱導者であつた。彼の自由の声は英国の政治上輝かしいものであるが、その本質は深く宗教的態度に根ざしている。その自由の原則は、神の創造から、サタンと人の原罪の理解、人の救いにかかわる神による歴史的介入への洞察、善との戦いの本質についての卓見の中に貫いているのである。

#### 注

(1) *Paradise Regained* I, 126 - 8. *Samson Agonistes* 293.

(2) *Theodicy*.

The justification of God, which is concerned with reconciling the goodness and justice of God with the

observable facts of evil and suffering in the world, *The New Encyclopedia Britannica* 1988.

- (<sup>c</sup>) Dennis Richard Danielson: *Milton's Good God*, Univ. of Ottawa, 1982, p. 125.

- (<sup>d</sup>) Virginia R. Mollenkott, in *A Milton Encyclopedia* Bucknell Univ. Press, 1978, Vol. 3, p. 115.A.

*Complete Prose Works of John Milton*, Vol. VI, ed. by Maurice Kelleytr. by John Carey, Yale Univ. Press, 1973 p. 154.

- (<sup>e</sup>) *ibid.* p. 150.

Ps. 119: 68 冥 Mtt. 9:7 や穢ちいふ<sup>90</sup>

See *Gen.* 1:31, *PL* VII 548 – 550.

- (<sup>f</sup>) See *PR* III 122 – 6.

- (<sup>g</sup>) O. Lovejoy: *The Great Chain of Being*, 1936 p. 49 地<sup>91</sup>

- (<sup>h</sup>) Dante → *Divina Comedia* と言及し<sup>92</sup>

*Il Purgatorio* Canto XVI ll. 70 – 83.

*Il Paradiso* Canto V, ll. 19 – 24.

See:

*Dante The Divine Comedy*. 2 *Purgatory* translated by

Dorothy L. Sayers, Penguin Books, 1971 p. 190.

*Dante The Divine Comedy*. 3 *Paradise* translated by

Dorothy L. Sayers and Barbara Reynolds, Penguin Books, 1971 pp. 90 – 1.

- (<sup>i</sup>) immutable

Fowler (ed.) *The Poems of John Milton* Longman, 1968, *PL* iii 125 – 8n.

- (<sup>j</sup>) *PL* IX 468.

- (<sup>k</sup>) かなへた<sup>93</sup> <sup>94</sup> <sup>95</sup> <sup>96</sup> <sup>97</sup> <sup>98</sup> <sup>99</sup> <sup>100</sup> <sup>101</sup> <sup>102</sup> <sup>103</sup> <sup>104</sup> <sup>105</sup> <sup>106</sup> <sup>107</sup> <sup>108</sup> <sup>109</sup> <sup>110</sup> <sup>111</sup> <sup>112</sup> <sup>113</sup> <sup>114</sup> <sup>115</sup> <sup>116</sup> <sup>117</sup> <sup>118</sup> <sup>119</sup> <sup>120</sup> <sup>121</sup> <sup>122</sup> <sup>123</sup> <sup>124</sup> <sup>125</sup> <sup>126</sup> <sup>127</sup> <sup>128</sup> <sup>129</sup> <sup>130</sup> <sup>131</sup> <sup>132</sup> <sup>133</sup> <sup>134</sup> <sup>135</sup> <sup>136</sup> <sup>137</sup> <sup>138</sup> <sup>139</sup> <sup>140</sup> <sup>141</sup> <sup>142</sup> <sup>143</sup> <sup>144</sup> <sup>145</sup> <sup>146</sup> <sup>147</sup> <sup>148</sup> <sup>149</sup> <sup>150</sup> <sup>151</sup> <sup>152</sup> <sup>153</sup> <sup>154</sup> <sup>155</sup> <sup>156</sup> <sup>157</sup> <sup>158</sup> <sup>159</sup> <sup>160</sup> <sup>161</sup> <sup>162</sup> <sup>163</sup> <sup>164</sup> <sup>165</sup> <sup>166</sup> <sup>167</sup> <sup>168</sup> <sup>169</sup> <sup>170</sup> <sup>171</sup> <sup>172</sup> <sup>173</sup> <sup>174</sup> <sup>175</sup> <sup>176</sup> <sup>177</sup> <sup>178</sup> <sup>179</sup> <sup>180</sup> <sup>181</sup> <sup>182</sup> <sup>183</sup> <sup>184</sup> <sup>185</sup> <sup>186</sup> <sup>187</sup> <sup>188</sup> <sup>189</sup> <sup>190</sup> <sup>191</sup> <sup>192</sup> <sup>193</sup> <sup>194</sup> <sup>195</sup> <sup>196</sup> <sup>197</sup> <sup>198</sup> <sup>199</sup> <sup>200</sup> <sup>201</sup> <sup>202</sup> <sup>203</sup> <sup>204</sup> <sup>205</sup> <sup>206</sup> <sup>207</sup> <sup>208</sup> <sup>209</sup> <sup>210</sup> <sup>211</sup> <sup>212</sup> <sup>213</sup> <sup>214</sup> <sup>215</sup> <sup>216</sup> <sup>217</sup> <sup>218</sup> <sup>219</sup> <sup>220</sup> <sup>221</sup> <sup>222</sup> <sup>223</sup> <sup>224</sup> <sup>225</sup> <sup>226</sup> <sup>227</sup> <sup>228</sup> <sup>229</sup> <sup>230</sup> <sup>231</sup> <sup>232</sup> <sup>233</sup> <sup>234</sup> <sup>235</sup> <sup>236</sup> <sup>237</sup> <sup>238</sup> <sup>239</sup> <sup>240</sup> <sup>241</sup> <sup>242</sup> <sup>243</sup> <sup>244</sup> <sup>245</sup> <sup>246</sup> <sup>247</sup> <sup>248</sup> <sup>249</sup> <sup>250</sup> <sup>251</sup> <sup>252</sup> <sup>253</sup> <sup>254</sup> <sup>255</sup> <sup>256</sup> <sup>257</sup> <sup>258</sup> <sup>259</sup> <sup>260</sup> <sup>261</sup> <sup>262</sup> <sup>263</sup> <sup>264</sup> <sup>265</sup> <sup>266</sup> <sup>267</sup> <sup>268</sup> <sup>269</sup> <sup>270</sup> <sup>271</sup> <sup>272</sup> <sup>273</sup> <sup>274</sup> <sup>275</sup> <sup>276</sup> <sup>277</sup> <sup>278</sup> <sup>279</sup> <sup>280</sup> <sup>281</sup> <sup>282</sup> <sup>283</sup> <sup>284</sup> <sup>285</sup> <sup>286</sup> <sup>287</sup> <sup>288</sup> <sup>289</sup> <sup>290</sup> <sup>291</sup> <sup>292</sup> <sup>293</sup> <sup>294</sup> <sup>295</sup> <sup>296</sup> <sup>297</sup> <sup>298</sup> <sup>299</sup> <sup>300</sup> <sup>301</sup> <sup>302</sup> <sup>303</sup> <sup>304</sup> <sup>305</sup> <sup>306</sup> <sup>307</sup> <sup>308</sup> <sup>309</sup> <sup>310</sup> <sup>311</sup> <sup>312</sup> <sup>313</sup> <sup>314</sup> <sup>315</sup> <sup>316</sup> <sup>317</sup> <sup>318</sup> <sup>319</sup> <sup>320</sup> <sup>321</sup> <sup>322</sup> <sup>323</sup> <sup>324</sup> <sup>325</sup> <sup>326</sup> <sup>327</sup> <sup>328</sup> <sup>329</sup> <sup>330</sup> <sup>331</sup> <sup>332</sup> <sup>333</sup> <sup>334</sup> <sup>335</sup> <sup>336</sup> <sup>337</sup> <sup>338</sup> <sup>339</sup> <sup>340</sup> <sup>341</sup> <sup>342</sup> <sup>343</sup> <sup>344</sup> <sup>345</sup> <sup>346</sup> <sup>347</sup> <sup>348</sup> <sup>349</sup> <sup>350</sup> <sup>351</sup> <sup>352</sup> <sup>353</sup> <sup>354</sup> <sup>355</sup> <sup>356</sup> <sup>357</sup> <sup>358</sup> <sup>359</sup> <sup>360</sup> <sup>361</sup> <sup>362</sup> <sup>363</sup> <sup>364</sup> <sup>365</sup> <sup>366</sup> <sup>367</sup> <sup>368</sup> <sup>369</sup> <sup>370</sup> <sup>371</sup> <sup>372</sup> <sup>373</sup> <sup>374</sup> <sup>375</sup> <sup>376</sup> <sup>377</sup> <sup>378</sup> <sup>379</sup> <sup>380</sup> <sup>381</sup> <sup>382</sup> <sup>383</sup> <sup>384</sup> <sup>385</sup> <sup>386</sup> <sup>387</sup> <sup>388</sup> <sup>389</sup> <sup>390</sup> <sup>391</sup> <sup>392</sup> <sup>393</sup> <sup>394</sup> <sup>395</sup> <sup>396</sup> <sup>397</sup> <sup>398</sup> <sup>399</sup> <sup>400</sup> <sup>401</sup> <sup>402</sup> <sup>403</sup> <sup>404</sup> <sup>405</sup> <sup>406</sup> <sup>407</sup> <sup>408</sup> <sup>409</sup> <sup>410</sup> <sup>411</sup> <sup>412</sup> <sup>413</sup> <sup>414</sup> <sup>415</sup> <sup>416</sup> <sup>417</sup> <sup>418</sup> <sup>419</sup> <sup>420</sup> <sup>421</sup> <sup>422</sup> <sup>423</sup> <sup>424</sup> <sup>425</sup> <sup>426</sup> <sup>427</sup> <sup>428</sup> <sup>429</sup> <sup>430</sup> <sup>431</sup> <sup>432</sup> <sup>433</sup> <sup>434</sup> <sup>435</sup> <sup>436</sup> <sup>437</sup> <sup>438</sup> <sup>439</sup> <sup>440</sup> <sup>441</sup> <sup>442</sup> <sup>443</sup> <sup>444</sup> <sup>445</sup> <sup>446</sup> <sup>447</sup> <sup>448</sup> <sup>449</sup> <sup>450</sup> <sup>451</sup> <sup>452</sup> <sup>453</sup> <sup>454</sup> <sup>455</sup> <sup>456</sup> <sup>457</sup> <sup>458</sup> <sup>459</sup> <sup>460</sup> <sup>461</sup> <sup>462</sup> <sup>463</sup> <sup>464</sup> <sup>465</sup> <sup>466</sup> <sup>467</sup> <sup>468</sup> <sup>469</sup> <sup>470</sup> <sup>471</sup> <sup>472</sup> <sup>473</sup> <sup>474</sup> <sup>475</sup> <sup>476</sup> <sup>477</sup> <sup>478</sup> <sup>479</sup> <sup>480</sup> <sup>481</sup> <sup>482</sup> <sup>483</sup> <sup>484</sup> <sup>485</sup> <sup>486</sup> <sup>487</sup> <sup>488</sup> <sup>489</sup> <sup>490</sup> <sup>491</sup> <sup>492</sup> <sup>493</sup> <sup>494</sup> <sup>495</sup> <sup>496</sup> <sup>497</sup> <sup>498</sup> <sup>499</sup> <sup>500</sup> <sup>501</sup> <sup>502</sup> <sup>503</sup> <sup>504</sup> <sup>505</sup> <sup>506</sup> <sup>507</sup> <sup>508</sup> <sup>509</sup> <sup>510</sup> <sup>511</sup> <sup>512</sup> <sup>513</sup> <sup>514</sup> <sup>515</sup> <sup>516</sup> <sup>517</sup> <sup>518</sup> <sup>519</sup> <sup>520</sup> <sup>521</sup> <sup>522</sup> <sup>523</sup> <sup>524</sup> <sup>525</sup> <sup>526</sup> <sup>527</sup> <sup>528</sup> <sup>529</sup> <sup>530</sup> <sup>531</sup> <sup>532</sup> <sup>533</sup> <sup>534</sup> <sup>535</sup> <sup>536</sup> <sup>537</sup> <sup>538</sup> <sup>539</sup> <sup>540</sup> <sup>541</sup> <sup>542</sup> <sup>543</sup> <sup>544</sup> <sup>545</sup> <sup>546</sup> <sup>547</sup> <sup>548</sup> <sup>549</sup> <sup>550</sup> <sup>551</sup> <sup>552</sup> <sup>553</sup> <sup>554</sup> <sup>555</sup> <sup>556</sup> <sup>557</sup> <sup>558</sup> <sup>559</sup> <sup>560</sup> <sup>561</sup> <sup>562</sup> <sup>563</sup> <sup>564</sup> <sup>565</sup> <sup>566</sup> <sup>567</sup> <sup>568</sup> <sup>569</sup> <sup>570</sup> <sup>571</sup> <sup>572</sup> <sup>573</sup> <sup>574</sup> <sup>575</sup> <sup>576</sup> <sup>577</sup> <sup>578</sup> <sup>579</sup> <sup>580</sup> <sup>581</sup> <sup>582</sup> <sup>583</sup> <sup>584</sup> <sup>585</sup> <sup>586</sup> <sup>587</sup> <sup>588</sup> <sup>589</sup> <sup>590</sup> <sup>591</sup> <sup>592</sup> <sup>593</sup> <sup>594</sup> <sup>595</sup> <sup>596</sup> <sup>597</sup> <sup>598</sup> <sup>599</sup> <sup>600</sup> <sup>601</sup> <sup>602</sup> <sup>603</sup> <sup>604</sup> <sup>605</sup> <sup>606</sup> <sup>607</sup> <sup>608</sup> <sup>609</sup> <sup>610</sup> <sup>611</sup> <sup>612</sup> <sup>613</sup> <sup>614</sup> <sup>615</sup> <sup>616</sup> <sup>617</sup> <sup>618</sup> <sup>619</sup> <sup>620</sup> <sup>621</sup> <sup>622</sup> <sup>623</sup> <sup>624</sup> <sup>625</sup> <sup>626</sup> <sup>627</sup> <sup>628</sup> <sup>629</sup> <sup>630</sup> <sup>631</sup> <sup>632</sup> <sup>633</sup> <sup>634</sup> <sup>635</sup> <sup>636</sup> <sup>637</sup> <sup>638</sup> <sup>639</sup> <sup>640</sup> <sup>641</sup> <sup>642</sup> <sup>643</sup> <sup>644</sup> <sup>645</sup> <sup>646</sup> <sup>647</sup> <sup>648</sup> <sup>649</sup> <sup>650</sup> <sup>651</sup> <sup>652</sup> <sup>653</sup> <sup>654</sup> <sup>655</sup> <sup>656</sup> <sup>657</sup> <sup>658</sup> <sup>659</sup> <sup>660</sup> <sup>661</sup> <sup>662</sup> <sup>663</sup> <sup>664</sup> <sup>665</sup> <sup>666</sup> <sup>667</sup> <sup>668</sup> <sup>669</sup> <sup>670</sup> <sup>671</sup> <sup>672</sup> <sup>673</sup> <sup>674</sup> <sup>675</sup> <sup>676</sup> <sup>677</sup> <sup>678</sup> <sup>679</sup> <sup>680</sup> <sup>681</sup> <sup>682</sup> <sup>683</sup> <sup>684</sup> <sup>685</sup> <sup>686</sup> <sup>687</sup> <sup>688</sup> <sup>689</sup> <sup>690</sup> <sup>691</sup> <sup>692</sup> <sup>693</sup> <sup>694</sup> <sup>695</sup> <sup>696</sup> <sup>697</sup> <sup>698</sup> <sup>699</sup> <sup>700</sup> <sup>701</sup> <sup>702</sup> <sup>703</sup> <sup>704</sup> <sup>705</sup> <sup>706</sup> <sup>707</sup> <sup>708</sup> <sup>709</sup> <sup>710</sup> <sup>711</sup> <sup>712</sup> <sup>713</sup> <sup>714</sup> <sup>715</sup> <sup>716</sup> <sup>717</sup> <sup>718</sup> <sup>719</sup> <sup>720</sup> <sup>721</sup> <sup>722</sup> <sup>723</sup> <sup>724</sup> <sup>725</sup> <sup>726</sup> <sup>727</sup> <sup>728</sup> <sup>729</sup> <sup>730</sup> <sup>731</sup> <sup>732</sup> <sup>733</sup> <sup>734</sup> <sup>735</sup> <sup>736</sup> <sup>737</sup> <sup>738</sup> <sup>739</sup> <sup>740</sup> <sup>741</sup> <sup>742</sup> <sup>743</sup> <sup>744</sup> <sup>745</sup> <sup>746</sup> <sup>747</sup> <sup>748</sup> <sup>749</sup> <sup>750</sup> <sup>751</sup> <sup>752</sup> <sup>753</sup> <sup>754</sup> <sup>755</sup> <sup>756</sup> <sup>757</sup> <sup>758</sup> <sup>759</sup> <sup>760</sup> <sup>761</sup> <sup>762</sup> <sup>763</sup> <sup>764</sup> <sup>765</sup> <sup>766</sup> <sup>767</sup> <sup>768</sup> <sup>769</sup> <sup>770</sup> <sup>771</sup> <sup>772</sup> <sup>773</sup> <sup>774</sup> <sup>775</sup> <sup>776</sup> <sup>777</sup> <sup>778</sup> <sup>779</sup> <sup>780</sup> <sup>781</sup> <sup>782</sup> <sup>783</sup> <sup>784</sup> <sup>785</sup> <sup>786</sup> <sup>787</sup> <sup>788</sup> <sup>789</sup> <sup>790</sup> <sup>791</sup> <sup>792</sup> <sup>793</sup> <sup>794</sup> <sup>795</sup> <sup>796</sup> <sup>797</sup> <sup>798</sup> <sup>799</sup> <sup>800</sup> <sup>801</sup> <sup>802</sup> <sup>803</sup> <sup>804</sup> <sup>805</sup> <sup>806</sup> <sup>807</sup> <sup>808</sup> <sup>809</sup> <sup>810</sup> <sup>811</sup> <sup>812</sup> <sup>813</sup> <sup>814</sup> <sup>815</sup> <sup>816</sup> <sup>817</sup> <sup>818</sup> <sup>819</sup> <sup>820</sup> <sup>821</sup> <sup>822</sup> <sup>823</sup> <sup>824</sup> <sup>825</sup> <sup>826</sup> <sup>827</sup> <sup>828</sup> <sup>829</sup> <sup>830</sup> <sup>831</sup> <sup>832</sup> <sup>833</sup> <sup>834</sup> <sup>835</sup> <sup>836</sup> <sup>837</sup> <sup>838</sup> <sup>839</sup> <sup>840</sup> <sup>841</sup> <sup>842</sup> <sup>843</sup> <sup>844</sup> <sup>845</sup> <sup>846</sup> <sup>847</sup> <sup>848</sup> <sup>849</sup> <sup>850</sup> <sup>851</sup> <sup>852</sup> <sup>853</sup> <sup>854</sup> <sup>855</sup> <sup>856</sup> <sup>857</sup> <sup>858</sup> <sup>859</sup> <sup>860</sup> <sup>861</sup> <sup>862</sup> <sup>863</sup> <sup>864</sup> <sup>865</sup> <sup>866</sup> <sup>867</sup> <sup>868</sup> <sup>869</sup> <sup>870</sup> <sup>871</sup> <sup>872</sup> <sup>873</sup> <sup>874</sup> <sup>875</sup> <sup>876</sup> <sup>877</sup> <sup>878</sup> <sup>879</sup> <sup>880</sup> <sup>881</sup> <sup>882</sup> <sup>883</sup> <sup>884</sup> <sup>885</sup> <sup>886</sup> <sup>887</sup> <sup>888</sup> <sup>889</sup> <sup>890</sup> <sup>891</sup> <sup>892</sup> <sup>893</sup> <sup>894</sup> <sup>895</sup> <sup>896</sup> <sup>897</sup> <sup>898</sup> <sup>899</sup> <sup>900</sup> <sup>901</sup> <sup>902</sup> <sup>903</sup> <sup>904</sup> <sup>905</sup> <sup>906</sup> <sup>907</sup> <sup>908</sup> <sup>909</sup> <sup>910</sup> <sup>911</sup> <sup>912</sup> <sup>913</sup> <sup>914</sup> <sup>915</sup> <sup>916</sup> <sup>917</sup> <sup>918</sup> <sup>919</sup> <sup>920</sup> <sup>921</sup> <sup>922</sup> <sup>923</sup> <sup>924</sup> <sup>925</sup> <sup>926</sup> <sup>927</sup> <sup>928</sup> <sup>929</sup> <sup>930</sup> <sup>931</sup> <sup>932</sup> <sup>933</sup> <sup>934</sup> <sup>935</sup> <sup>936</sup> <sup>937</sup> <sup>938</sup> <sup>939</sup> <sup>940</sup> <sup>941</sup> <sup>942</sup> <sup>943</sup> <sup>944</sup> <sup>945</sup> <sup>946</sup> <sup>947</sup> <sup>948</sup> <sup>949</sup> <sup>950</sup> <sup>951</sup> <sup>952</sup> <sup>953</sup> <sup>954</sup> <sup>955</sup> <sup>956</sup> <sup>957</sup> <sup>958</sup> <sup>959</sup> <sup>960</sup> <sup>961</sup> <sup>962</sup> <sup>963</sup> <sup>964</sup> <sup>965</sup> <sup>966</sup> <sup>967</sup> <sup>968</sup> <sup>969</sup> <sup>970</sup> <sup>971</sup> <sup>972</sup> <sup>973</sup> <sup>974</sup> <sup>975</sup> <sup>976</sup> <sup>977</sup> <sup>978</sup> <sup>979</sup> <sup>980</sup> <sup>981</sup> <sup>982</sup> <sup>983</sup> <sup>984</sup> <sup>985</sup> <sup>986</sup> <sup>987</sup> <sup>988</sup> <sup>989</sup> <sup>990</sup> <sup>991</sup> <sup>992</sup> <sup>993</sup> <sup>994</sup> <sup>995</sup> <sup>996</sup> <sup>997</sup> <sup>998</sup> <sup>999</sup> <sup>1000</sup>

- (<sup>l</sup>) *PL* I 241.

- (<sup>m</sup>) Fowler 註 The predicament of God といふ<sup>95</sup> iii 125 – 8n.

- (<sup>n</sup>) *PL* XI 502 – 7.

- (<sup>o</sup>) *PL* XI 784 – 95.

- (<sup>p</sup>) *PL* XI 805.

- (<sup>q</sup>) *PL* X 46.

- (<sup>r</sup>) *PL* XII 102 – 9.

- (<sup>s</sup>) *PL* XII 80 – 100.

- (<sup>t</sup>) *Rom.* 8:2. *Heb.* 2:15, *Jacob* 1:25, 2:12.

- (<sup>u</sup>) *Mtt.* 20:28.

- (<sup>v</sup>) *John* 1:29.

- (<sup>w</sup>) *Heb.* 2:15.

